

理事長対談〈ソワレ〉

## 二つの協会、今とこれから



撮影／落合健人（サンライズガーデン）

日本児童文芸家協会理事長 山本 省三  
日本児童文学者協会理事長 藤田のぼる  
司会 奥山 恵（本誌編集長）

2023年7月13日 於：銀の鈴社 会議室

### 児文協の主な委員会

総務委員会  
財務委員会  
文書委員会  
サークル委員会  
協会二賞委員会  
おはなしエンジェル子ども創作コンクール委員会  
ひろすけ童話賞委員会  
絵本テキストグランプリ委員会  
日本新築こども文学賞委員会  
日本動物児童文学賞委員会  
編集委員会  
広報委員会  
刊行委員会  
渉外・著作権委員会  
展覧会委員会  
サロン委員会

### 児文協の主な部・委員会

組織部  
会報部  
機関誌部  
研究部  
出版企画部  
事業部  
著作権部  
国際部  
情報ネットワーク部  
財政部  
子どもと読書の委員会  
子どもと平和の委員会  
関西センター

七月一三日、両協会にゆかりのある鎌倉の「銀の鈴社」の会議室にて、両理事長の対談が行われました。

今、それぞれの活動は……

——前半（マチネ）『児童文芸』二〇二三年冬号）では、両協会の「これまで」についてお話しいただきましたが、後半（ソワレ）は、現在から未来を見据えて語り合っていただけだと思います。まず、それぞれの協会が、今、どんな活動をされているのか、お話しいただけますか。  
**山本** はい、最近はコロナとかがあって、なかなか直接会って活動ができないのですが、Zoomを使って交流できないか、ということ、「サロン委員会」をたちあげました。編集者や作家の方々をゲストに招いて、会員同士で情報交換をしています。二〇人くらいの少人数ですが、いろいろな方が参加してくれて、好評です。それから、私が理事長になってから、理事が書く時間を削ってまで、ボランティア活動するのはおかしい、職能団体としてまず書くことの原点にたちもどろうと考えました。それで、アンソロジーの出版などにも力を入れています。企画を

持ち込んだ新星出版社など新しい版元が協力すると言ってくれ、二〇二〇年から五巻出た『謎解きホームルーム』シリーズがヒットし、海外にも翻訳されています。『恐怖文庫』などのアンソロジーも重版しながら、続いています。それで、他の出版社からも声がかかるようになり、「刊行委員会」の活動も活発になっています。従来あったような図書館向けでなく、書店で売れる本、うちはエンタメの作家がたくさんいるので、そういう方にも書いてもらっています。とにかく、書く場と書くための情報を得られる協会でありたいですね。

**藤田** ぼくは二〇二〇年度から理事長を務めています。ちょうどコロナが拡大した頃で、すべての活動が影響を受けましたが、中でも一番対応を迫られたのが講座ですね。五〇年以上続いている児童

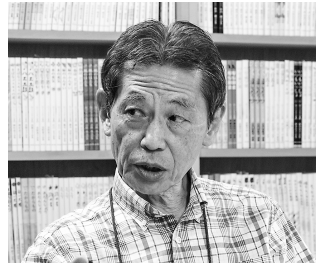


文学学校の他に、ゼミ形式の創作教室というのもありますけど、この間、リモートの講座を始めたなら、予想以上にいい反響で、創作教室の講師も地方の人に頼めるようになったというのも、今までになかったことです。また、今特に発信力は大切なので、ホームページを、初めて専門の業者を入れて、一新しました。

一方で、多くの会員が何を求めているかを考えると、創作上の悩み、そして書いたものがなかなか出版に結びつかないということなのではないかということ、編集者の方たちにも参加してもらって、合評創作研究会という場を設けました。

もう一〇年ほどになります。これがきっかけで実際に出版に結びついたり、ということが出てきています。

——他には、どんな活動がありますか。  
**山本** うちには、こやま峰子さんが企業に声をかけてくれたのがきっかけで、いろいろな企業とのコラボ活動もしてきました。今は、日本新薬と組んで、子どもが診察室などで楽しめる作品の募集などに協力しています。協力をいただいた、こちらで一次審査等をし、絵本作りの手伝いなどをします。かなり完成度の高い



藤田のぼる (ふじた・のぼる)

1950年秋田県生まれ。児童文学の評論と創作の両面で活動。著書に『児童文学に今を問う』、創作に『みんなの家出』、絵本に『麦畑になれなかった屋根たち』(永島慎二・絵)など。2020年より日本児童文学者協会理事長。

ものができあがり、毎年相当数を配布しています。企業としては広報と社会貢献を兼ねた活動になっていると思います。あと、ひろすけ童話賞は、町とタイアップして、過去に受賞もしたさだまさしさんが審査員に加われました。これも話題になるでしょう。

—— 児文協はあまりそういう企業提携はないですね。

藤田 そういうことに慣れてないというか、人脈がないということかな。

山本 提携もブラッくな企業等、気をつけないといけないですね。でも、絵本は、ビジュアル的にもインパクトがあり、社会的なアピール力も持っています。またテレビCMに比べれば費用も少額なの

で、絵本を作りたい企業はけっこうあると思いますよ。

## 両協会に集う人びと

—— 協会の方の地域的な広がりはどんな感じですか。

山本 最近、東北がすごく盛り上がりつついて、東北の作家たちが、震災から一〇年を機に「みちのく童話賞」を設けたり、『みちのく妖怪ツアー』(新日本出版社)シリーズを出したりしています。こういう動きが、あちこちで起きてくれたらいいですね、やるのはたいへんですけどね。

うちは、「サークル」という名前で地域ごとの集まりはありますが、高齢化していて。でも、最近では、さっきのリモートの「サロン」で、地域別というよりは、もうみんなまで、外国ともつながって開ける感じになってきています。

藤田 児文協には「支部」というのが、北海道から沖縄まで二〇ほどあります。元々は、地域の課題を文学的に受けとめていくという問題意識があったわけですが、今、そういうありようは難しくなっていて、高齢化とも重なってどこも悩みを抱えています。それもあって、子ども

ゆめ基金の助成を受けた公開研究会を、東京と地方で交互に開催しています。

あと、首都圏と並んで会員が多いのは関西圏なわけですが、一五年ほど前ですけど、「関西センター」という、有志による関西事務局のような形を作って、ここが中心になって会員が集まったり、講座を企画したりしていて、地方組織の新しい形かなと思っています。

—— 会員の専門性といえますか、児文協は作家と評論家、あと作家であり図書館員の方がけっこう思い浮かびますが、児文芸さんはどうですか？

山本 絵も描く人、エンタメの人も増えています。でも、評論家はほとんどいないですね。

藤田 児文協は創立当初から、活動の中心に評論分野の人が多いのは確かです。ただ、評論家志望という人はなかなかいない。それもあって、評論募集の賞も設けています。

山本 もともと児文芸は、最初から間口を広げていましたからね。画家さん、映像関係、一般作家の方まで。

藤田 今、本屋にいくと圧倒的に多いのは児童文庫ですし、今は文庫でデビュ

してほぼその世界のみで活躍しているという書き手も多いですよ。児童協は、そういう書き手とあまり接点がないわけです。協会の将来ということはもちろん、児童文学そのものの将来ということも考えた時、そこをどう捉えたらいいのか、問題を感じています。

**山本** うちは、石崎洋司さんがこちらに入ってこられたり、事務局員だった秋木真さんが大ヒット作を生んだり、そういうつながりが入ってくる方が多いです。

——他に、問題を感じていることは？

**山本** 会員、特に若い人は、会費の見返りを求めるけど、会員サービスに奔走するのはおかしいと言っているんですね。理事などの負担を減らすために創作コン

クールとかいろいろないイベントなどもやめてしまったけれど、会費払ってどんなメリットがあるかと問われると、若い人にどう理解してもらうかが課題ですね。

——会費はいくらですか？

**山本** 雑誌こみで二〇〇〇円です。

**藤田** 児童協は一八〇〇円プラス雑誌代六〇〇円。あと、何年前からユース会員制度を作って、入会金と会費の割引をしています。

**山本** 若い人はなかなか入ってこないですが、個人的には、あまり無理しないで、こじんまりと情報交換しつつ、少数精鋭でやっていくのがいいのではないかと思っています。拡大で薄まるより、濃縮して残っていくことを考えるのが大切と。

営利企業ではないですからね。

——児童協はどういう問題がありますか。  
**藤田** かなり根本的な問題なんですけど、一九六〇年代以降、長く活動の中心にいたのは、現代児童文学を出発させた世代の人たちで、その人たちのモチーフは、

一つには子どもたちに支持される児童文学を生み出すこと、もう一つは社会の中で児童文学というジャンルが市民権を得ることだったと思います。それが一応達成された今、新しい児童文学者の組織体の像をなかなか描けないでいる、というのが、率直なところだと思います。

そんな中で、ぼくは「なぜ子どもに向けて書くのか」という意味を考え合うというのが、原点だと思うんですね。ただ、



山本省三（やまもと・しょうぞう）

1952年神奈川県生まれ。絵本・童話作家。文と挿絵の両方を手掛け、絵本からノンフィクションまで執筆。著書に、『動物ふしぎ発見』シリーズ、『キセキのスバゲッティー』、『暗号サイバール学園』シリーズなど。2019年より日本児童文芸家協会理事長。

それをどういう形で実際の活動に結びつけていくのかというのは、簡単ではないですね。

—— 児文協は、「民主主義的児童文学を創造する」という綱領をどうするかについて議論したり、また今年は「子どもの権利」というテーマをすえて、活動したりしていますか……。

藤田 はい、創立時の「民主主義的な児童文学の創造と普及」という綱領を単なるお題目として奉るといふ発想はないんですけど、それでも敗戦の直後にこのスローガンを掲げた先輩たちの思いは受けとめたいし、子どもたちを取りまく様々な状況を考えると、これは決して昔話では済まないだろうという気がするわけです。

「子どもの権利」という問題は、ブラック校則のことなんかで、元から頭にありましたが、特にコロナになって、一方的に休校になったりして、つくづく子どもたち自身は社会の中で何も言えない存在だなと思いました。その意味で、今は、本当に児童文学に関わる者の出番だなという思いが強いです。

## 二つの団体のこれから

—— それぞれ違いも、共通の悩みもあります。児童文学の団体が二つあるということについて、今後どうですか。児文協では、かつて、両協会を「統合」しようという話が出たことがありましたが。

藤田 はい、二〇〇九年に那須正幹さんが会長だった時に、二つの団体を統合したらと提案されました。那須さんは山口県在住で、首都圏以外で初めて会長になった方ですが、関西で集まりがあった時、若い会員から「なぜ児童文学者の団体が二つあるのですか」と聞かれても、うまく答えられなかったそうです。それがきっかけで、「統合」について提案されて、理事会でも、賛成、反対、慎重派等々、当然いろいろな意見がありました。ぼく

自身も前々から、両協会に属さない書き手も含めて、児童文学作家が一つになることが、いろいろな意味で発信力を高めていけるのではないかとこの考えを持っていました。当時、従来の社団法人が、公益社団法人一般社団のどちらかに移行しなければならぬという制度改正があったので、統合するには好都合な時期でもあったんですね。それで児文芸の事務所も併せて、当時の村松理事長に、今そうした議論をしている旨をお伝えしました。まあ結局、実現はしませんでした。

ただ、今はむしろ、無理に統合しても、なんだか中途半端な組織になってしまっているのではないかという思いが強いですね。やはり、なんのための、何をやる組織なのかということから、じっくり考えないと難しいなと思っています。ただ、那須さんが問題提起してくれたことで、統合という問題がタブーではなくなりました。そういう中から、特に若い人たちからアクションが出てくるのを期待しています。山本 ぼくも、このせまい児童文学の世界に団体が二つあっていいのか、とは思っています。力も分散しますしね。ただ、今のところ、うちの協会では、若い人たち

の中で、そういう考えを持つてる人はいないんじゃないかな。やはり、それぞれの協会の意味を考えつつ、統合する機運が生まれてこないかね。

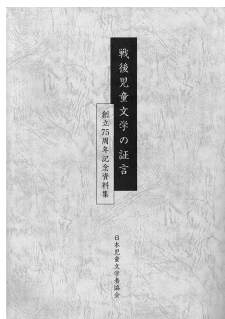
——では、協会と理事長さんの今後の展望はいかがでしょう？

**山本** 正直、なるようにしかならないという感じですね（笑）。こちらは、理事の七二歳定年というのがあるので、ほくももうすぐ定年です。

**藤田** 児文協は定年はないですが、ほくの場合は、長く事務局長を務めて、「ぬし」みたいになっちゃってるので、いかにそういうポジションから撤退できるかが、大問題ですね（笑）。

**山本** 定年もだんだんのびてきてますが、ほくとしては、書くことで応援したいです。会員も高齢化しているので、無理なことはしないで、書くことを優先して活動してほしいです。やはり、魅力的な作品を書く人が団体にいっぱいいることが大切だと思いますので。

**藤田** これ、協会七五周年記念でやつた『戦後児童文学の証言——創立75周年記念資料集』なんです。創立趣意書からその後の活動方針はもとより、協会



の各分野の活動の歴史を全部詰め込みました。事務所の中に、結構古い資料が残っていて、創立時の決算書なんかも出てきました。でも、こうした貴重な資料がいずれ散逸するのは目に見えているし、自分がいるうちになんとかしなくては、と思っています。長くお世話になってきた児文協への責任を一つ果たせたかな、という思いでいます。

——最後に、今回コラボ特集が実現した協会の雑誌というのは何であり、今後どうあるべきか、いかがですか。

**山本** うちは、編集の負担を減らすということもあるので、特集を減らして、むしろすぐれた作品を載せていくことで、書く指針になるような創作を中心をやつていこうかなと思っています。

**藤田** 『日本児童文学』の場合は、児童文学をめぐる様々な課題を考える問題提

起が命だと思っています。でもそれは、評論や研究が専門の人に向けてということではなくて、書き手や普及に関わる人にこそ考えてほしい問題を取り上げているつもりです。たとえば、今年の七月・八月号は「いま、図書館を訪ねて」という特集なんですけど、近年増えている図書館を舞台にした作品についての論考はもちろんです。図書館をめぐるコラムや、司書さんたちへのアンケート、創作は図書館を舞台にした短編という風に構成されています。なんとかこの路線でがんばって、いろいろな人に読んでもらえるようにしていきたいですね。

**山本** 編集者さんはけっこう掲載作品を読んできてますよね。

——いろいろな本の知識を得るという意味で、司書さんなんかも評論やブックガイドは読んでいると思います。

**山本** そうすると、二つ協会があつて、二つの雑誌がある意味もあるでしょうね。

**藤田** 両方に投稿している人もいますよね。この機会にみなさん、両方の雑誌に目を通してみてください。

——うまく、まとめていただきました。本日は、ありがとうございます。